



参加した学部生や院生ら



# どろんと ワークショップ

in 附属幼稚園



美術教育講座  
教授 西野 慎二  
撮影：山根千佳子准教授

協力してくれた学生は、苦勞したよつである。プランについては、略図では示すが、事細かに先回りしておしえることは、あまり好きではない。20キロ袋の粘土を150個ですから、それを附属幼稚園まで運ぶのは容易ではない。準備の3日間は普通小型ワゴン車1台とあとは台車3台で往復し搬入した。それでも積み下ろしは手で持ち上げるわけで、学生には重いらしい。地球の引力だから体の重心に引き寄せれば、と運び終わる頃にはみんなうまくなった。

ワークショップの前日の午後、彫塑研究室の院生が、「粘土の滑り台がへこんで滑ることができません。」と連絡してきた。滑り台の構造を箱椅子や、板材、合板、滑りやすいように梱包材のビニールに見直

すことに。滑り台のふちも粘土を布でまいてさらに粘土を盛り上げて工夫を考えさせた。

**わすれものを届けに来たよつな**

ねらいや、目標を超える反響のうちにあつという間にワークショップは、終わってしまった。園児の予想以上の喜びように、今までにない爽快感や満たされた実感をおぼえることができました。

安全面はあらかじめ配慮したが、実際のところ何が起るかわからない実験的なものでした。しかしながら、「昔はあつた。ではなく今やろうー」は、今もとめられている課題ではないでしょうか？ 幼児の時にこそ天然でダイナミックなあそびをやったほうがいい。

現代のシステムやプログラムに枠づけされた教育は、本来の創造や表現といった情操の育みを窮屈にしているかもしれない。

幼児の全身泥だらけになって遊び作品作りをする姿に、なにやらわすれものを見つけた気がしました。

**卒園記念作品に向けて**

十月下旬には、美術学生と幼年教育学生とで年長組の園児個々に卒園記念作品をつくりまです。どんなオブジェが出来上がるか楽しみです。十二月には美術学生の作品と一緒に奈良市美術館「青丹彩展」で展示予定です。

**あそびの本能を呼び起こす**

泥だらけになって遊んでいることも近頃見かけなくなつて久しいような気がします。秘密基地あそびを、枝やひも板、段ボールでつくっているという情景にもしばらく出くわさない。虫捕り少年は、今もいるのか？

そのような、こともがもともも持っているあそび本能を大事にしたいものです。

5年ほど前から、粘土まみれのドロドロヌルヌルができないものかとふと考えていました。できれば、幼稚園で試したいと思ひ、学部の「幼児の造形」の授業で幼年教育専修所属の受講生にそれとなく何歳児なら可能かきいてみていました。前田喜四郎前附属幼稚園園長にも打診をしながら、引き継ぎいただきました。



**いざチャレンジ！**

玉村公三彦附属幼稚園園長、上野由利子副園長、年長組担当の長谷川先生、山本先生のご理解と幼年教育専修と彫塑研究室を中心とした美術専修学生の協力を得て、見切り発車、学長裁量経費の後押しも頂いて、いざ決行！

7月の青空の下、どろんとワークショップ始まりです。耐熱耐水シートを砂場の約3倍のスペースに敷き詰めて前日から浅いドロドロポールをつくっておきました。まず、手足からじゃぶじゃぶ足踏みで慣れてもらひ、どろんとすべり台でぬるぬる体験へと展開しました。歓喜の声にあらかじめ用意していたピグミー族のポリフォニーの音はかき消されていました。

**情操は体感して記憶に残す**

すでに、どろんこの園児たちは、手の腹や腕で2メートル近いワニをつくって乗ったたり、塔を体で支えながら作っては倒したりと、考えていたイメージを上回る創作意欲に感心し、園児の粘土で体感して遊ぶ本能に驚く、すばらしい！

ただひたすら泥プールにねころぶ子や、泥すべり台で繰り返し遊ぶ子、これもまた楽しみ方は自由。人間本来の素朴な「おもしろい」が、記憶となり将来の創造・発想の原点となつてほしい。

**何もかも教えない**

「幼稚園で3トンの粘土を使つてのどろんとワークショップ！」